本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

夏目激石の『門』論－他者としての「小六」の意味－

doi:10.29714/TKJJ.200205.0002

淡江日本論叢, (11), 2002

作者/Author： 曾秋桂

頁數/Page： 42-64

出版日期/Publication Date：2002/05

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200205.0002

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

夏目漱石の『門』論—他者としての「小六」の意味—

淡江大學副教授
曾秋桂

『門』の研究の現状においては、主人公宗助の参禅及び宗助の夫婦像の二点が、論争の争点となっている。その宗助の夫婦像だけを取ってみても、活発に論争が繰り返されていることが分かる。それに関する諸説を大まかに整理すると、「理想主義的な夫婦愛」の説、夫婦の不和説、二つの対立する読みのどちらも可能とするようないわゆる中間的な説の三つの説がある。

面白いことに、研究者の性別によって、「正体不明」とされた宗助の妻御米に対する評価が丸で正反対となっている。そうした差異が生じた原因は最近流行っているシェンダー的論理と関係していると思われるが、作品に即して夫婦像を読むという原点に返って御米の正体を把握することから、宗助の夫婦像を明らかにすることも可能になるのではないか。そこで、特に本論文では、いままであまり重視されていなかった宗助の弟、小六という他者の視点から、御米の正体の把握を試みたいのである。

結果としては、意識的に愛嬌のある振る舞いをしたり、無意識的に技巧をこらしたりするような御米の側面が窺われる。主体的に女を演じている女性である御米が従来、言われてきたような「夫婦理想像」をどれだけ維持出来るかは疑わしい。換言すれば、宗助夫婦の「同棲和合」は男女関係としての夫婦という面では、内に崩壊する動因を含んだものだと、結論せざるをえない。このように、『門』のテーマについても、そうした点から見直すことが出来るように思われる。

キーワード

夫婦理想像・夫婦不和・正体不明・他者・技巧

一、始めに

『門』の研究の現状においては、主人公宗助の参禅及び宗助の夫婦像の二点が、論争の争点となっている。その宗助の夫婦像だけを取ってみても、活発に論争が繰り返されていることが分かる。それに関する諸説を整理すると、三つの方向に大きく分けて見ることが出来る。一つは、谷崎潤一郎がその切り口に始めた「理想主義的な夫婦愛」[1]の説である。また、それを支持した江藤淳[2]、内田道雄[3]、三好行雄[4]などの一連の論説が見られる。もう一つは、それに対立する牧野陽子[5]、西垣勤[6]、越智治雄[7]、山田輝彦[8]などによって提出された宗助夫婦の不和諸説である。三つ目は、二つの対立する読みのどちらも可能とするようないわゆる中間的な論説[9]である。

このように、『門』の研究の現状を見ると、まさしく藤井淑禎が言ったように、「今までの論というのが非常に細かいところの差異で自説を打ち出していくという、そういうふうな繰り返し『門』の場合特に顕著で、なかなかそれを打ち破った新しい論という

---

[1]「『門』を評す」を「新思潮」創刊号明治四十三年に発表した。

[2]江藤淳「門」罪からの遁走（『夏目漱石』）昭和３１年７月東京ライフ社）

[3]内田道雄「門」をめぐって――夏目漱石論（二）（『漱石作品論集成』第七巻所収　Ｐ３０）

[4]三好行雄が『鑑賞日本現代文学第５巻夏目漱石』（Ｐ１４８　角川書店　昭和５９年３月）では、「確かに、宗助とお米は＜道義上切り離す事の出来ない一つの有機体＞として、＜此抱合の中に、尋常の夫婦に見出すし難い親和と飽満と、それに伴なう倦怠とを兼ね具へ＞、＜自己を幸福と評価する事＞（十四）のできる夫婦である。導入部にさわやかな秋日和の日ざしとぬくもりは、そうした夫婦に、いかにもふさわしい風景だといえる」と触れている。

[5]牧野陽子は「『門』のなかの闇」（『日本文学研究資料叢書夏目漱石Ⅲ』Ｐ１７１所収有精堂昭和６０年７月）では、「坂井の家に彼らの罪の象徴である安井が訪ねて来る事を宗助がお米には決して口外しないことからも伺われる様に、二人にはそれぞれ孤独が、灯をめぐる、時折微妙なずれを生じる二つの同心円のように、それぞれの心理的サイクルがあり、相手には言えない、ひとたび口にしたら灯が消えてしまうような不安があるのである」と述べている。

[6]西垣勤が『門』（『漱石作品論集成』第七巻所収　Ｐ４２）では、次の意見を出している。
この二人の姿は、自分の苦悩を相手に打ち明けるのは相手にとって無用なこと、いたずらに苦しませることにしかならない、という種の合いにつつまれているのは言うまでもないが、それ以上を出るものではない。
そのような『罪』の回避に向かわざるを得なくなる宗助を一方とする愛を、「理想主義的な夫婦愛」とか「幸福な恋愛の物語」とか言うことは矛盾でしかありえない。それはそれとしても、江藤氏「理想主義的な夫婦愛」の描かれたとす

[7]越智治雄「門」（『漱石作品論集成』第七巻所収　Ｐ４７）では、次の意見を出している。
いわば人生を耐えているのである。人生の痛みをと言ってもよいだろう。宗助や御米のみせる微笑の陰翳はそこにある。

[8]山田輝彦『門』覚書（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ１６７－１７８）

[9]畑有三「門」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ５４－６０）、水谷昭夫「漱石的苦悩と罪『門』における運命の偶然性」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ６１－７２）、重松康雄「「門」の意」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ７３－８２）などである。

のは、出にくかったわけ」[10]だという通りである。

だが、多くの論が出されたと言っても、宗助の夫婦像に関して、既に研究し尽されているとは言えない面がある。というのは、御米については、まだ解明されていない部分が多く残っているからである。例えば、不思議にも「正体不明」[11]だと言われている御米について、彼女に対する評価が研究者の性別によってはっきりと分かれているのである。男性の研究者の間では、御米[12]は人気のある人物である一方で、女性の研究者[13]の間では、それほど評価されていないのである。そうした差異が生じた原因は最近流行っているシェンダー的論理と関係していると思われるが、作品に即して夫婦像を読むという原点に返って御米の正体を把握することから、宗助の夫婦像を明らかにすることも可能になるのではないか。そこで、特に本論文では、いままであまり重視されていなかった宗助の弟、小六という他者の視点から、「女学生の言葉を使い、しょっちゅう微笑して」[14]いる御米の正体の把握を試みたいのである。

二、宗助夫婦の対話基本パターン――＜見る＞御米と＜見ない＞宗助

他者である小六によって、御米の正体、ないし宗助の夫婦像を究めるために、まず、他者の介入する前の宗助夫婦の対話基本パターンを見るところから始めたい。『門』を論ずる際、諸論でよく注目されてきた長い冒頭の一節をそのまま引用する。

引用１．

宗助は先刻から縁側へ坐蒲團を持ち出して日當りの好ささうな所へ氣樂に胡座をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。（中略）障子の中では、細君が裁縫をしてゐる。

---

[10] 藤井淑禎の主張「鼎談」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２７４　桜楓社　１９９１年１０月）
[11] 浅野洋の主張「鼎談」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２７０　桜楓社　１９９１年１０月）
[12] 『国文学』昭和６２年五月号第３２巻６号學燈社の「対談――漱石が創った女たち」では、吉本隆行と小川国夫の二人とも御米に対して高く評価している。また、社本武は「『門』」で、「お米はどちらかといえばおとなしい女です。女らしいこまやかさをもってしかも賢い女性です」と意見を示している。（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ１２３）
[13]赤井恵子は、「鼎談」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２６９　桜楓社　１９９１年１０月）で触れたように、『新潮』の一九八九年六月号の「対談」（「愛の矛盾か関係のやさしさか」）では、三枝和子は、「御米が、やっぱり男の人が読んで好ましい、伏し目がちの慎ましやかな女性だから好きではない」と述べている。
[14]浅野洋の主張「鼎談」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２７０　桜楓社　１９９１年１０月）

「おい、好い天氣だな」と話し掛けた。細君は、
「えゝ」と云つたなりであつた。宗助も別に話がしたい譯でもなかつたと見えて、夫なり黙つて仕舞つた。しばらくすると今度細君の方から、
「ちつと散歩でも爲ていらつしやい」と云つた。然し其時は宗助は唯うんと云ふ生返事を返した丈であつた。
二、三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寐てゐる夫の姿を覗いて見た。（中略）肱に挾まれて顔がちつとも見えない。（中略）
「御米、近來の近の字はどう書いたつたけね」と尋ねた。（中略）
細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、其先で近の字を縁側へ書いて見せて、（中略）宗助は細君の顔も見ずに、「矢張り左樣か」と云つたが、（中略）「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。
（一　下線、波線論者）

波線の引用文を見ても分かるように、宗助は、ずっと細君の顔を見ずに、上の会話をしていたのである。その間に、細君は一度縁側にいる宗助の姿を覗いて見たが、顔は隠れて見えなかった。すなわち、以上の宗助夫婦の会話は、互いに顔を見ない状況の中で交わされたものだと認められる。

一方、細君の場合は、どうであろうか。上の会話の続きに、「容易な字でも、こりや變だ」と思ったことに対して、「矢つ張り神經衰弱の所爲」だと宗助が下した結論に、「「左樣よ」と細君は夫の顔を見た」とあるように、細君は、ここに至って、やっと主人の顔を見ることができたのである。いわば、宗助と同様に相手の顔を見ないまま、会話を進めていたのである。二人の会話が消極的に進められている証拠として、その後続く佐伯叔父宛に書いた手紙の場面が挙げられる。

引用２.

「ねえ、おい、夫で好いだらう」と念を押した。細君は惡いとも云ひ兼たと見えて、其上爭ひもしなかつた。宗助は郵便を持つた儘、座敷から直ぐ玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、是は茶の間の縁傳ひに玄關に出た。「一寸散歩に行つて來るよ」「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。（一　下線論者）

airiti

下線の引用文の通り、細君は宗助が書いた手紙の内容にあまり積極的に関与しようとせずに、ただ自分の手元にある裁縫の仕事を続けているだけである。だが、その後、宗助の留守中に来られた小六の質問に対して、御米が「そりや私もつい見なかつたの。けれども、屹度あの相談よ」（一）と答えた言葉を見ると、宗助に手紙の内容について相談を持ち出されたが、積極的に関与しなかったにもかかわらず、「つい見なかつたの」と逃げ口上めいたことを言ってごまかしている。ここでは、御米の宗助に対する対応仕方が小六の場合になると、少し違っていると思われる。

さらに、引用１の会話の内容について、特に下線の部分を見ると、互いに相手の話に対してを積極的に対応しようとする姿勢が少しも見られない。寧ろ、相手に対する素っ気のない反応だと思われる。この点に関して、石原千秋は、「この夫婦にあっては、交わりは言葉や表情に顕在化され、拒否は非言語的交通や沈黙の底に押し隠されているのである。宗助の姿勢も御米の微笑も、そのようなダブル・バインドの表現なのだ。その裂け目に、彼らのそれぞれの主体がかけられていたのではないだろうか」[15]と見ている。正しくその指摘の通りである。すなわち、この「ダブル・バインド」は、この夫婦が六年間生活する中で、作り上げた関係だということである。

また、同日に出来事の続きとして、宗助が小六と風呂から帰った場面にも、宗助夫婦が持つ特有のコミュニケーションの仕方が見られる。

引用３．

御米は、「好い御湯だつた事？」と聞いた。宗助はたゞ一言、「うん」と答へた丈であつたが、其様子は素氣ないと云ふよりも、寧ろ湯上りで、精神が弛緩した氣味に見えた。

「中々好い湯でした」と小六が御米の方を見て調子を合せた。（三　）

語り手は宗助の返事した振りを「湯上りで、精神が弛緩した氣味」と解釈しているが、御米に対する宗助の素っ気のない返事ぶりという点では、引用１の会話の部分と変わらない。また、食後も、＜「何だつて、あんなに笑ふんだい」と夫が聞いた。けれども御

[15] 石原千秋＜家＞の不在――「門」論（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２３４　桜楓社　１９９１年１０月）

米の顔は見ずに却つて菓子皿の中を覗いてゐた＞と描写している。ここでも、宗助はやはり同じように御米に対して、素っ気ない態度を取っている。

この冒頭にある宗助夫婦の対応場面を、第十四章にある「宗助と御米とは仲の好い夫婦に違なかつた。一所になってから今日迄六年程の長い月日をまだ半日も氣不味く暮らした事はなかつた」という言い方を合わせて見ると、冒頭に描かれた夫婦の会話は、気まずく暮らした半日ではなく、六年の間に夫婦が探り当てたコミュニケーションの普通の仕方に違いない。それは、小六に頼まれて、小六の前で裁縫をする時に、「これが夫だと、何時迄も黙つて針を動かすのが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、さう投遣に出來ないのが、又御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした」（十）とあることでも裏付けられる。すなわち、夫婦二人きりの場合は、黙っていても、素っ気のない返事をしても、それは気まずいことではなく、ただ夫婦の間での特有のコミュニケーションの仕方そのものなのである。

しかし、小六が表れる場面では、その冒頭に描かれたような素っ気のない態度と打って変わって、御米の宗助に対する態度には、些かな変化が認められる。その変化を単刀直入に言えば、御米の表情が活発になっているということである。そうした御米の変化の一つとして、以下に挙げた「笑い」の表現は、その変化をよく示している。

宗助に近来の近の字をどう書くかと聞かれた時、「別に呆れた樣子もなく、若い女に特有なけたゝましい笑聲も立てず」（一）にいた御米は、今度、小六を交えて三人で食事し、宗助に護謨風船の達磨を見せてもらった時に、「女だけに聲を出して笑った」（三）。このように、夫婦二人だけいる場合に見せなかった「笑い」の表情は小六を交えた場面に見られるのである。そればかりではなく、御米は宗助を「調戯ふ樣な口調」や、「夫を辯護する樣」にものを言ったことがある。こうして見れば、小六という他者を交えた場面で、宗助は相変らず素っ気のない態度を取っているのに対して、御米は対応の仕方を変えているのである。

とはいえ、いつもとあまり変わらなかった、宗助の御米を＜見ない＞という素っ気のない態度は、小六が同居してから、「其所へ小六が引越して來た。宗助は其頃の御米を觀察して、體質の状態やら、精神の模樣やら、夫丈に能く知てゐたから」（十一）とあるように、御米をよく＜見る＞ようになったのである。要するに、御米は小六という他者の前で宗助を＜見る＞対応に変えたが、宗助は小六が同居する前の時点までは、あまり御米を＜見ない＞対応を続けている。こうして見ると、宗助夫婦の対話基本パターン

では、<見る>御米と<見ない>宗助という対比がくっきりと浮かび上がってくる。しかし、この対比は、他者である小六が介入することによって崩れ始めたと言えよう。

三、他者としての小六の設定意味

さて、他者としての小六の設定[16]は、宗助の夫婦関係において、どのような意味を持つものかを探って見よう。

宗助夫婦の家に入ってくる他者としての小六は、宗助を、「手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んで許ゐて頼りにも力にもなって呉れない、眞底は情合に薄い人」（三）と見ているように、兄の宗助に対して、必ずしも好意的ではない。一方、御米に対しては、「御米には、自分が始めから小六に嫌はれてゐると云ふ自覺があ」り（六）、「二人が東京へ出たてには、單純な子供の頭から、正直に御米を惡んでゐた。御米にも宗助にもそれが能く分かつてゐた」（十五）と繰り返されるように、小六は御米を嫌っていると言えよう。しかし、この嫌っていると思われる兄嫁を異性として見たことが一回ある。「小六は御米の後姿の、羽織が帶で高くなつた邊を眺めてゐた」という描写があり、石原千秋は「性の拒否と許し」[17]と言われる「帶」を見ていたことによって、その異性めいた感覚が暗示されていると考えている。

一方、御米は小六に対しては、どうであろうか。その御米が小六に対して示した様子を、小六との同居前と同居後の両方から細かく見よう。

表（一）御米が小六に対して示した様子（下線論者）

内容／時間順序	御米が小六に対して思ったこと	小六が御米に対して思ったこと	描写
同居前	①「二人が東京へ出たてには、單純な子供の頭から、正直に御米を惡んでゐた。	①「兄はたゞ手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んで許ゐて頼り	①「小六は御米の後姿の、羽織が帶で高くなつた邊を眺めてゐた」（一）

[16] 岡三郎が「『門』における男と女」の論文では、小六の『門』における役割を、宗助との兄と弟という血縁関係において捉えていて、宗助夫婦においてあまり重視していない。(『国文学解釈と鑑賞』第５５巻９号Ｐ９６　１９９０年９月　至文堂)

[17] 同石原千秋の論文Ｐ２３５

airiti

	御米にも宗助にもそれが能く分かつてゐた」（十五） ②「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。「有るんですか」と小六が聞いた。「いゝえ、無いの」と正直に答えへたが（一） ③御米は女だけに聲を出して笑つたが、御櫃の蓋を開けて、夫の飯を盛ひながら、「兄さんも隨分呑氣ね」と小六の方を向いて、半ば夫を辯護する樣に云つた（三）	にも力にもなって呉れない、眞底は情合に薄い人だ」（三）	
同居後 ①昼食の時	①突然此小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合わせながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異な經驗であつた。それも下女が臺所で働いてゐる		二人（御米と小六・論者注）は交るがわる火鉢に手を翳した。（八） ｃｆ 宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ

airiti

	ときは、未だしもだが、清の影も音もしないとなると、猶窮屈な感じが起つた。無論小六よりも御米の方が年上であるし、又從來の關係から云つても、兩性を絡み付ける艶つぽい空氣は、箍束的な初期に於てすら、二人の間に起り得べき筈のものではなかつた。御米は小六と差向に膳に着くときの此氣ぶつせいな心持が、何時になつたら消えるだらうと、心の中で私に疑ぐつ小六が引き移る迄は、こんな結果が出やうとは、丸で氣が付かなつたのだから猶更當惑した。（八）		の火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた。（十四）
②小六が酒を飲んだ場合	①誰もゐない晝間のうち抔に、あまり顔を赤くして歸つて來られるのが、不安だ		

airiti

	つたのである。（十）		
③小六に裁縫を頼まれた時	①仕舞には、姉さん一寸こゝを縫つて下さいと、小六の方から進んで、御米に物を頼む樣になつた。さうして御米が絣の羽織を受け取つて、袖口の綻を繕つてゐる間、小六は何にもせずに其所へ坐つて、御米の手先を見詰めてゐた。これが夫だと、何時迄も黙つて針を動かすのが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、さう投遣に出來ないのが、又御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした。（十）		

表（一）にある同居前の項目例②の通り、小六と同居する前、ないと思う御菓子を小六にすすめたが、御菓子がないから代わりに御馳走をすると約束した御米であるが、食事の後、宗助と小六の前にないと公言した御菓子を出した。しかも、その御菓子の出所

を小六に一言も説明しなかったのである。このような御米の行動[18]は、いかにも辻褄が合わないものに思われるが、だが、辻褄が合わないと言うよりも、寧ろ意識的に自分のことを嫌っている小六に愛嬌を見せるように対応していると考えた方がよかろう。詳細は第四節の（イ）「御菓子」の所で詳論する。

表（一）にある同居後の項目を見ると、小六と同居した後、御米が気詰まりに感じた場面は、三箇所ある。それは、小六と二人きりになった昼食、昼間のうち小六が（御米の家に清の下女がいるため、誰もいないという言い方は理解しにくいが、おそらく宗助の留守中という意味であろう）酒を飲んで帰った時、そして小六に裁縫を頼まれた時である。いずれも小六と二人で対面する時に限って、御米が気詰まりに感じたのである。何故御米がこのように気詰まりに感じせざるをえないかというと、それは、御米が小六を異性、少なくとも一人の男として意識しているからであろう。

表（一）にある同居前の描写においては、前述したように、小六は御米を異性の存在として見ていることが窺われる。また、同居後の「火鉢に手を翳す」という描写は、小六が御米を異性の存在として見ていることを暗示する一つの場面だと思われる。実は、『門』では、性的事情に関しては、省筆に近い[19]描写がされている。例えば、宗助夫婦がどのように、「不徳義の男女」になったかは詳しく書かれていない。その代わり、ただ、「大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである」（十四）とあるように、暗示として描かれているだけである。これと類似している表現は、前述の、小六が御米の帯を見たこと、そして小六と御米の「二人は交るがわる火鉢に手を翳した」（八）のことである。これは御米が小六と二人で障子の張り替えをした日に、「寒い風」が吹くため、「火鉢に手を翳した」場面で、別に不自然な動作ではないが、しかし、これを、宗助と御米がした「不徳義」なことを暗示している「大風」と同質なものとして考えると、その場面が宗助と御米の関係が生じた場面とよく似ていることが分かる。この暗示的「大風」が事実となる前に、宗助は安井の留守中に、安井の住いに来て、御米に「宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つの火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた」（十四）と描写されている。これが「火鉢に手を翳す」と

---

[18] それは第一章と第三照との描写を比較すれば、分かる。第三章では、「御米が御菓子皿と茶盆を兩手に持つて、又出て來た」とある。また、「あなた御菓子食べなくつて」と御米が小六に聞いたことがある。

[19] 浅野洋「鼎談」（『漱石作品論集成』第七巻Ｐ２７１）

いう行動は、この宗助と御米の二人の感情的交流を表す表現として無視できないのである。それと同じことが、感情的に対立していたはずの小六と御米の間に見られるようになったという変化に注目すべきである。

この場面が意味を持っていることは、御米がこの結婚前の事を思い出す箇所があるからである。以下のように引用する。

引用４.

その晩夫婦は火鉢に掛けた鐵瓶を、双方手で掩ふ樣にして差し向つた。「何うですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。御米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が奇麗に浮んだ。（六）

御米は小六と同居後、宗助と夫婦になる前のことを思い出した時に、「火鉢に掛けた鐵瓶を、双方から手で掩ふ樣にして差し向つた」という、結婚前を思わせる状況が設置されている。この「火鉢に掛けた鐵瓶を、双方から手で掩ふ樣にして差し向つた」は、「火鉢に手を翳す」とは、意味的に相通しているものだと思われる。このように、「火鉢」は、どうも男女二人の間に潜む感情的なものを暗示しているように見える。他方、『門』の「火鉢」を見ても分かるように、御米と「火鉢に手を翳す」とはっきりと描かれた異性は、宗助と小六だけである[20]。いわば、この「火鉢に手を翳す」とは、ただ日常生活の一風景に止まらず、それを超えた暗示のあるもののように思われる。作品の中にそうした暗示がなければ、「此奴（小六・論者注）も或は己と同一の運命に陷るために生れて來たのではなからうかと考へると、今度は大いに心掛りになつた。時によると、心掛りよりは不愉快であつた」（四）と、宗助が思うような具体的気配は作品中にはな

[20]以下は、『門』の中に「火鉢に手を翳す」と描写された個所である。

①Ｐ６４０宗助は暗い座敷の中で默然と手焙へ手を翳してゐた。（二）

②Ｐ６８２叔母さは竹で編んだ丸い手桶の上へ手を翳して、「何ですね、御米さん、此御部屋は夏涼しさうで結構だが、是からちと寒う御座んすね」（五）

③Ｐ７２０二人は交るがわる火鉢に手を翳した。（八）

④Ｐ７９１宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つの火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた。（十四）

い。その上、宗助が『門』の結末で「本當難有わね。漸くの事春になつて」と喜んだ御米に対して、「うん、然し又ぢき冬になるよ」と言ったこの一言の真意がくみ取れない。要するに、御米が小六を一人の男として、小六が御米を一人の女として見ることの可能性は、宗助と御米がそうであったこととダブルして、作品中で暗示されていると思われる。第四節のダブルイメージと合わせて見ると、その可能性はさらに高まってくると認められる。

御米は、以前は小六に嫌われていることを知っていたが、同居後、小六を一人の男として意識し、「愛嬌的」あるいは「技巧的」に振る舞うように変化していったのである。この振る舞いは、宗助が初対面で認識した、「若い女に有勝の嬌羞といふもの」があまり多く見られない「ひっそりとして」、「落ち付いた」女[21]と呼応するものがあるとも考えられる。つまり、逆に言えば、御米は男性に対して、対等にそして自分のペースで対応が出来るような、もっと言えば、自分次第で相手に姿を変えて見せることが出来るようなタイプの女性ではないかと、ということである。

従って、『門』で他者としての「小六」が設けられたことは、宗助にとっては、「弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる樣な氣がしてならな」（四）いというように、若い時の自分を甦らせるという意味がある。と同時に御米にとっては、「技巧的」自己を再び活性化させる意味が認められる。

四、ダブルイメージの形成

以上のこととから、小六という他者の介入は、宗助夫婦のそれぞれに意味を持っていることが分かる。そればかりではなく、次の「御菓子」、「油を塗った頭」、「火鉢に手を翳す」の三つの方向から、さらに、『門』でのダブルイメージが浮き彫りにされる。

---

[21]宗助は結婚前の御米について、次のように述べたことがある。

御米は若い女に有勝の嬌羞といふものを、初對面の宗助に向つて、あまり多く表はさなかつた。たゞ普通の人間を静にして言葉寡なに切り詰めた丈に見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでゐる時と、あまり區別のない程落付いた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、御米のひつそりしてゐたのは、穴勝耻かしがつて、人の前へ出るのを避けるため許でもなかつたんだと思つた。（十四）

airiti

（イ）「御菓子」

『門』の中に、御菓子に関する描写は五回ほどある。それを表（二）に示す。

表（二）御菓子に関する描写

内容 作品に出た時間順番	内容	御菓子の出所
宗助が御米に薦めた菓子	ふと御米が遣つて來た。其所迄買物に出たから、序に寄つたんだと云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして歸つた。（十四）	宗助が買ったと推測される。
②御米が持ってきた菓子	御米が菓子皿と茶盆を兩手に持つて、又出て來た。（三） ｃｆ 御米は「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。「有るんですか」と小六が聞いた。「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、（中略）「何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」（一）	★不明
③唐饅頭	其晩宗助は到來の菓子折の蓋を開けて、唐饅頭を頬張りながら、（九）	坂井がお礼として送ってくれた。
④田舎饅頭	木皿の上には護謨毬ほどな	坂井がお土産に貰ったもの

airiti

	大きな田舎饅頭が一つ載せてあつた。（中略）主人は～無雑作に饅頭を割つて、むしやむしや食ひ始めた。宗助も顰に倣つた。（十六）	
⑤金平糖	下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。（中略）主人はわざと箸で金玉糖を挾んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。（二十二）	坂井が銀婚式にお土産に貰ったもの

表（二）のように、この五箇所の「御菓子」は、いずれも宗助がいる場面に描写されている。ただし、（一）では、御米が小六に「御菓子」をすすめる場面があるが、「何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」（一）と御米が言ったように、作品に登場しなかったため、この一回を除くことにした。それにしても、上述の五箇所がいずれも宗助のいる場面で出ていること、そして、「何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」（一）という御米の言葉、また「御米の顔を見ずに却つて菓子皿の中を覗いてゐた」（二）という宗助の描写を見ると、宗助は「御菓子」が好きで、しかも、それが交際に深く関わっていることが判明した。

その①は、夫婦になる前、安井の留守中に、宗助と御米が二人きりになった場面である。暗示的な「大風」と同様に、ここの「御菓子」は、二人が親密に交際している証と見られる。③は、泥棒に盗まれた本を届けた礼として坂井が送ってくれたもので、それを契機にして、坂井との付き合いが頻繁になった。そして、④、⑤は、坂井を訪問した時に出されたものである。このように、「御菓子」は、それぞれ場面に応じて、親しい交際を示す小道具として使用されていることが分かった。

第三節では、小六との関係の点では、特に②が注目される。それは、同居前に小六が訪問に来た時、御米と交わした会話にある。

airiti

引用５.

「御茶なら澤山です」と小六が云つた。

「厭？」女學生流に念を押した御米は

「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。

「有るんですか」と小六が聞いた。

「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、思ひ出した樣に、「待つて頂戴、有るかも知れないわ」と云ひながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六は御米の後姿の、羽織が帶で高くなつた邊を眺めてゐた。（中略）

「駄目よ。何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」と云ひながら、又火鉢の向へ歸つて來た。

「ぢゃ晩に何か御馳走なさい」

「えゝ爲てよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。（一　下線論者）

引用の通り、御米は、御菓子がない代わりに御馳走を出すということになっている。しかし、食後、「御米が菓子皿と茶盆を兩手に持つて、又出て來」（三）て、その上、小六に「あなた御菓子食べなくつて」（三）と聞いた。この御米の動きは、どうも不自然さを感じせざるをえない。一体、御米が持ってきた御菓子はどこから来たものであろうか。

引用５の下線部分によると、小六と話した後の御米は時間を見て、夕食の支度を考えていて、御菓子を買いに行く様子もなさそうである。もちろん、下女を置いている家庭なので、下女の清に御菓子を買いに行かせることも不自然ではなかろうが、しかし、「今私も清も手が放せない所だから」と言った御米の言葉を見ると、その可能性はあまり高くない。一方、宗助が御菓子を買って帰ったとすれば、作品では彼は護謨風船の達磨以外に、他の買い物をしたとは書かれていない。だとすれば、食事の後に出された御菓子は、そもそも宗助の家にあったものとしか考えられない。

そうだとすると、ないと思う御菓子を探したが、見つからないため、なかったことにした御米が食事の後に宗助兄弟の前にないはずの御菓子を出したのは、御米の何らかの技巧であろうか、あるいは単なる作者のミスであろうか。作者のミスと言えば、確かに

参禅の時間をめぐって一日のずれが出たという研究報告が出されている[22]。だが、小道具の設置に関しては、例えば、坂井の犬の病気及び冒頭にある御米の手に持っている裁縫物の経緯[23]は首尾よく描かれている。それを見ると、この御菓子については、作者のミスとして簡単に結論を出せるものでなくなる。それでは、もし作者のミスではないとしたら、この御菓子探しの場面は、一体どういう意味を持つものであろうか。

この御菓子探しの場面に、第三節の性的暗示として取り上げた、小六が御米の帯を見ていた描写がある。この御菓子をめぐる段取りは、とりもなおさず、御米を小六に異性として匂わせる効果をもたせていると考えられる。また、この御菓子探しの場面は、御米の男性に対する技巧的一面を端的に示す役割を果たしている。というのは、御米は「お茶が入らない」と言った小六に、笑いながら「ぢや御菓子は」と聞いたり、今度は食後、何の説明もなく、小六の前にないはずの御菓子を出して、「御菓子たべなくつて」とすすめたりしているからである。この御米のわざとらしい動きは、かつて宗助に対してそうであったように、今度は小六に対する意識的な愛嬌であると同時に、無意識な技巧だと言えるのではないか。それを裏付けるのは、宗助の家の夕食前のシーンである。それを小六との同居前と同居後の二点に分けて、次の表（三）にまとめた。

表（三）宗助家の夕食前のシーン（下線論者）

内容／時間順		描写	座敷の戸を閉める人
小六との同居前	①	（御米は・論者注）「えゝ今直」と云つたなり、引き返さうとしたが、又戻つて來て、「其代り<u>小六さ</u>	小六が洋燈を點ける。

[22] 吉川裕子「夏目漱石「門」における作品構成の問題点」（『樟蔭国文学』第三十二号Ｐ６９－９７平成７年３月２０日大阪樟蔭女子大学国語国文学会）

[23]坂井の家は泥棒に入られた時、＜「平常の様に犬がゐると好かつたんですが、生憎病氣なので、四、五日前病院へ入れて仕舞つたもんですから」と主人が殘念がつた＞（Ｐ７１４）と記述されている。それに続いて坂井は小六を書生にしたいと宗助に言い出した時に、＜「何うです、私の所へ書生に寄こしちや、少しは社會教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病氣で病院へ這入る一ヶ月前とかに、徴兵檢査に合格して入營したぎり今では一人もゐないのださうであつた＞（Ｐ８０７）と因果を關係つけて述べている。また、冒頭に出た、御米が縫った服の経緯が、「宅では御米が宗助に着せる春の羽織を漸く縫ひ上げて、壓の代わりに坐蒲團の下へ入れて、自分で其上へ坐つてゐる所であつた」（十三）と、その行方が示されている。このように、細かい所まで首尾よく記述されていると言える。

airiti

		ん、憚り樣。座敷の戸を閉てて、洋燈を點けて頂戴。今私も清も手が放せない所だから」と依頼んだ。小六は簡單に「はあ」と云つて立ち上がつた。勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥樣是は何方へ移します」といふ聲がする。「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云ふ小六の聲がする。しゆうと湯が沸つて七輪の火へ懸つた樣子である。宗助は暗い座敷の中で黙然と手焙へ手を翳してゐた。灰の上に出た火の塊まり丈が色づいて赤く見えた。其時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピアノを鳴し出した。宗助は思ひ出した樣に立ち上がつて、座敷の雨戸を引きに縁側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を亂す上に、一つ二つの星が燦めいた。ピアノの音は孟宗竹の後から響いた。（二）	宗助が座敷の戸を閉める。
	②	斯う考へて宗助はしきりに烟草を吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲つて來る樣な音がする。それが時々已むと、已んだ間は寂として、吹き荒れる時よりは猶淋しい。宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘が鳴り出す時節だと思つた。 臺所へ出て見ると、細君は七輪の火を赤くして、肴の切身を燒いてゐた。清は流し元に曲んで漬物を洗つてゐた。二人とも口を利かずにせつせと自分の遣る事を遣つてゐる。宗助は障子を開けたなり、少時肴から垂る汁か膏の音を聞いてゐたが、無言の儘又障子を閉てゝ元の座へ戻つた。細君は眼さへ肴から離さなかつた。食事を濟まして、夫婦が火鉢を間に	★書かれていないまま、不明

airiti

		向ひ合つた時（四）	
小六と同居後		宗助は炬燵蒲團の中へ潜り込んで、すぐ横になつた。一方口に崖を控えてゐる座敷には、もう暮方の色が萌してゐた。宗助は手枕をして、何を考へるともなく、たゞ此暗く狹い景色を眺めてゐた。すると御米と清が臺所で働く音が、自分に關係のない隣の人の活動の如く聞えた。そのうち、障子丈がたゞ薄白く宗助の眼に映る樣に、部屋の中が暮れて來た。彼はそれでも凝として動かずにゐた。聲を出して洋燈を催促もなかつた。彼が暗い所から出て、晩食の膳に着いた時は、小六も六疊から出て來て、兄の向ふに坐つた。御米は忙しいので、つい忘れたと云つて、座敷の戸を締めに立つた。宗助は弟に夕方になつたら、ちと洋燈を點けるとか、戸を閉てるとかして、忙しい姉の手傳でもしたら好からうと注意したかつたが、昨今引き移つた許のものに、氣まづい事を云ふのも惡からうと思つて已めた。（九）	御米

（一）では、「座敷の眞中に眞四角な食卓を据ゑ」た御米の行動を見ると、この時点では、御米はまだ小六を客扱いをしていることが分かる。それにもかかわらず、「今私も清も手が放せない所だから」という理由で、御米が宗助ではなく、小六に雑用を頼んだのは、何故であろうか。その理由は、二点ほど考えられる。一つは、上述した三つの夕食前のシーンには共通して、忙しくしている御米達の手伝いをせずにいる宗助が出ており、何もさせないことで、家長として持ち上げる御米の心配りがあると思われる。もう一つは、自分のことを嫌っている小六と親しくしようとする御米の技巧が窺われる。

しかし、同居前と同居後を比べると、御米の行動は明らかに変わっている。それは、御米は小六と同居後、小六に夕食前の雑用を頼まなくなったのである。客として来るなら、まだいいが、一緒に住むようになってから、ある程度の遠慮が御米にあるかもしれ

ないが、それは、「淡泊な遠慮のない答をする譯に行かなくな」（八）[24]るという小六の考え方と同様に考えられる。だが、同居して四、五日しか経たなかった小六に、面倒な障子の張り替えを頼んだ御米が、何故、（二）で客として来た時と同じように、（九）で小六に戸閉まりを頼まなかったか疑問に思わざるをえない。御米が小六に戸閉まりを頼まなかったため、宗助は小六に注意しようと思う結果になっている。夕食前のシーンにおいても、前後で変化している御米の行動が認められ、御米の「技巧性」が浮き彫りにされるのである。

（ロ）「油を塗った頭」

さらに、御米の行動について見ていきたい。もう一つの手掛かりは、「甲斐の男」に関わる場面である。盗まれた本を届けた礼に貰った「御菓子」を始め、「屏風」が話題になって以来、坂井と親しくなってきた宗助は、坂井の家で、「甲斐の男」に会った。その「甲斐の男」に関して、「甲斐の男」の髪のスタイルと、「甲斐の男」が売った反物を見て御米が言った「安い（安井）」という二点によって、「甲斐の男」が安井の存在を暗示するために出現する人物だということが既に先行論究によって出されている[25]。その見解の是非を論ずる必要はないが、『門』の中で御米の口から出た「安い」という言葉は、別に「甲斐の男」が売った反物を見て初めて言ったものではなく、それより早く「屏風」売りの時に、もう既に言ったことのある言葉である[26]。そして、安井の髪のスタイルに似ている人は、別に「甲斐の男」に限らず、実は宗助もその一人である。それだけでなく、「床屋」に行って来たばかりだという設定は、安井の場合も宗助の場合も一致している。

さて、「床屋」に行って来たばかりだという一致した設定について見よう。第二章では、「床屋」へ行こうとした宗助は、ついに「床屋」へ行き損なった[27]。その後、（十

---

[24]『門』（八）Ｐ７２０には＜「小六さん、下宿は御馳走があつて」こんな質問に逢ふと、小六は下宿から遊びに來た時分の樣に、淡泊な遠慮のない答をする譯に行かななくなつた。＞という記述が見られる。

[25] 酒井秀行『漱石その陰翳』Ｐ１６８－１８８有精堂１９９０年４月

[26] 『門』（六）に次の記述が見られる。
「安過ぎるでせうか」と御米が聞いた。「左うさな」と宗助が答へた。彼は安いと云はれゝば、安い樣な氣がした。

[27]『門』（二）Ｐ６３７に、「奇麗な床屋へ行つて、髮を刈りたくなつた。何處にそんな奇麗なのがあるか、一寸見付からないうちに、日が限つて來たので、又電車へ乘つて、家の方へ向つた」とある。

三）に至って、宗助はやっと「床屋」に入った[28]。そして、「水道税の事で一寸聞き合せる必要が生じたので、宗助は歸り路に坂井へ寄つた」（十三）とあるように、寄った坂井の所で、「甲斐の男」に会ったのである。その時の宗助は、「頭へ香のする油を塗られて、景氣のいゝ聲を後から掛けられて、表へ出た時は、それでも清々した心持ちであつた。御米の勸通り髮を刈つた方が、結局氣を新たにする效果があつたのを、冷たい空氣の中で、宗助は自覺した」（十三）と描かれている。

一方、（十四）では、「安井は黒い髮に油を塗つて、目立つ程奇麗に頭を分けてゐた。さうして今床屋へ行つて來た所だと言譯らしい事を云つた」と描かれている。安井が本当に「床屋」の帰りかどうかは別として、とにかく宗助も安井も、頭に油を塗ったのが目立つという点では共通している。ここでは、二人のイメージが重なっている所が見逃せない。すなわち、（十四）で、宗助に重ねて再び「安井」のイメージを再生しようとする設定がされているように見えるのである。

（ハ）「火鉢に手を翳す」

「大風」、「御菓子」と同様に、第三節で論じた「火鉢に手を翳す」様子は、宗助と御米が夫婦になる前に親密に交際している証として見られる。一方、小六と御米が一緒に障子の張り替えをした場面にも、「火鉢に手を翳す」描写があることは、先に述べた通りである。それは、「二人は交るがわる火鉢に手を翳した」（八）のことである。単に「手を翳す」働きだけを見れば、『門』の中では、「火鉢に手を翳す」描写は他にもある。それは、「宗助は暗い座敷の中で默然と手焙へ手を翳してゐた」（二）、及び＜叔母さは竹で編んだ丸い手桶の上へ手を翳して、「何ですね、御米さん、此御部屋は夏涼しさうで結構だが、是からちと寒う御座んすね＞（五）の二例である。しかし、この二例に示されたように、一人の動きとして書かれているもので、二人が共にするものではない[29]。従って、結婚前の宗助と御米の仲を暗示するこの「火鉢に手を翳す」情景は、小六と御米の場合に当てはめると、御米と小六の二人の間で、異性に対する感覚を暗示

[28]『門』（十三）Ｐ７５６に、「新年の頭を拵らえやうといふ氣になつて、宗助は久し振に髮結床の敷居を跨いだ」とある。

[29]「宗助は暗い座敷の中で默然と手焙へ手を翳してゐた」（二）及び＜叔母さは竹で編んだ丸い手桶の上へ手を翳して、「何ですね、御米さん、此御部屋は夏涼しさうで結構だが、是からちと寒う御座んすね＞（五）の二例は、いずれも「手焙へ」「丸い手桶の上へ」と表現され、「（火鉢）に手を翳す」の用例とは全く同様ではない。

するものと言える。

以上、「御菓子」、「油を塗った頭」、「火鉢に手を翳す」の三つのキーワードから『門』を分析した。その結果として、一つの事実が浮かび上がってくる。それは、宗助夫婦の結婚前の、安井、御米、宗助の三者関係が、小六と同居後、宗助、御米、小六の三者関係へと反復され、転化する可能性が暗示されているということである。

五、結論

他者としての小六という視点から、『門』を考察してきた。小六を通して見ると、御米には今まで強調されてきた献身的な妻という一面とは違って、男性に対して対等であり、自己の意図に応じて対応するという、もう一つの技巧的な一面があることを立証することが出来た。それに、「御菓子」、「油で塗った頭」、「火鉢に手を翳す」の三つのキーワードを加えて、『門』を細かく分析すると、そこには見られる内容は、結婚前の安井、御米、宗助の三者間で形成された対比図が、小六の同居後には、宗助、御米、小六の三者関係の対比図へと反復され、転化しつつあることを暗示しているように思われる。このように、意識的に愛嬌のある振る舞いをしたり、無意識的に技巧をこらしたりするような、つまり、現代風の言い方で言えば、主体的に女を演じている女性である。御米が従来、言われてきたような「夫婦理想像」をどれだけ維持出来るかは疑わしい。換言すれば、宗助夫婦の「同棲和合」は、男女関係としての夫婦という面では、内に崩壊する動因を含んだものだと結論せざるをえない。『門』のテーマについても、そうした点から見直すことが出来るように思われる。

テキスト

『漱石全集』第四巻　岩波書店　昭和５０年３月

airiti

参考文献

１．谷崎潤一郎「『門』を評す」『新思潮』創刊号　明治４３年

２．江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社　昭和３１年７月

３．三好行雄『鑑賞日本現代文学第５巻夏目漱石』角川書店　昭和５９年３月

４．牧野陽子「『門』のなかの闇」（『日本文学研究資料叢書夏目漱石Ⅲ』所収有精堂　昭和６０年７月）

５．『国文学解釈と教材の研究』第３２巻６号　學燈社　昭和６２年５月

６．酒井秀行『漱石その陰翳』有精堂　１９９０年４月

７『国文学解釈と鑑賞』第５５巻９号　至文堂　１９９０年９月

８．『漱石作品論集成』第七巻　桜楓社１９９１年１０月

９．吉川裕子「夏目漱石「門」における作品構成の問題点」（『樟蔭国文学』第三十二号所収　大阪樟蔭女子大学国語国文学会　平成７年３月）